里見八犬傳

拾七編

巻四十四

5416
95

へ13
3416
95

拾七編

松野勝名院

巳十巳

南總里見八犬傳第九輯巻之四十三四

東都　曲亭主人編次

第百七十回

定正水路ゆ大兵を行る　音音江中ゆ一船を焼く

話表は這時武藏の五十子の城内ゆ十二月五日の早天ゆ陸地の諸將山内顕定其子憲房足利成氏扇谷朝良千葉自胤四家の隊長白石重勝大石憲重横堀在村原胤久等各數萬の軍兵を將て下總の葛飾ゆ真間國府臺及行徳を投て向ひ合城内ゆ在る士卒ハ三萬餘名ゆ過ざりーゆ五日六日ゆ至りて甲斐の武田信昌の名代ゆ武田左京亮信隆を首めて近國の野武士伊豆相模の海賊毎勢と見て利を測り弓を負て敵を侮る烏合雲集の客兵五慮二萬餘名俱ゆ

定正の隊に附く欲りして各先非を謝し忠義を倡て皆五十子の城に
推参る事の便宜い是のまゝ上總る故の榎本の城に王千代丸圖書
助豊俊が舊臣濱縣馬助（浦安牛助友勝が姓名なり。）を密使として降書を齎し
且其六家臣の宅眷なる老弱四個の婦女子を保質に参らせく海上火攻の
約束あり。獨巨田新六郎助友が父道灌の名代として糟谷の館より領て來
る。隊兵を僅に五百に過ぎず況や今番水戰の利害を論ず理義を詳に
あゝ定正を諫るに犯さるゝとなるゝ〻ば定正怒り堪ずして追退けく是を
用ひず遊莫定正親子に相從ふ水軍の兵も既に五萬餘に及びる。開が
中に南海道より移り來ける海賊の頭領に水禽隼四郎緑林錦帆
八四九郎近範と喚做るあり。此い是鄕高に三河の苛子崎を犬江仁姥
雪乃保蛮崎照文等に對治せれし海龍王修羅五郎今純友查勘

太と伯仲を爭ふ驕勇の名煆煉く船をりく家とせられば水戰の進退を
辨まると極めく賢し。且一千餘の支黨あれば定正其罪を許さず則先鋒の
頭人とも威勢かくの如くそ。且赤岛百中（犬村大角が偽姓名なり。）の如き者の幇助あれば
猶且敵の胆を拉ぐ為に捷く總兵五萬を偽りく十萬餘騎とそ倡へける。然
れども這隊の水軍い十二月八日の早旦に洲崎の港口を攻破りて稲村の城を
拔くべしと逆ト定うければ定正朝寧父子い尚五十子の城内に在り。恁而七
日の早旦に大石源左衛門尉憲儀い精進し沐浴して鎧の上に淨衣を
被く駛馬に乘りく百個可の士卒を率いて谷山に赴く。馳く
馬より下立く攀登りく山の半腹なる洞内を覘ふに那風外道人い青石の
上に結跏趺坐して香を焼き合掌して經文を誦して在り。當下憲儀も
恭しく杖を朝ひく師父に喃大石憲儀が詣い人鄕高に教のひねの水戰に

太と伯仲を爭ふ驕勇の名煆煉く船をりく家とせられば水戰の進退を
辨まると極めく賢し。且一千餘の支黨あれば定正其罪を許さず則先鋒の
頭人とも威勢かくの如くそ。且赤岛百中（犬村大角が偽姓名なり。）の如き者の幇助あれば
猶且敵の胆を拉ぐ為に捷く總兵五萬を偽りく十萬餘騎とそ倡へける。然
れども這隊の水軍い十二月八日の早旦に洲崎の港口を攻破りて稲村の城を
拔くべしと逆ト定うければ定正朝寧父子い尚五十子の城内に在り。恁而七
日の早旦に大石源左衛門尉憲儀い精進し沐浴して鎧の上に淨衣を
被く駛馬に乘りく百個可の士卒を率いて谷山に赴く。馳く
馬より下立く攀登りく山の半腹なる洞内を覘ふに那風外道人い青石の
上に結跏趺坐して香を焼き合掌して經文を誦して在り。當下憲儀も
恭しく杖を朝ひく師父に喃大石憲儀が詣い人鄕高に教のひねの水戰に

宜しく日ハ既ふ是明日ふ至りぬ。いかく那順風を賜ふべしや。艦出ハ幾時候と好とせん。其の義を諮問まれとのられ。寡君の名代ふてそのうれ教のへと請問へば。風外道人領ぬく。善哉々々。信男信士現明日ハ八日ふ至りぬ。貧道ぞぶ教を更んや。明日丑三の時候よりて諸艦齊一漕出く。三浦れ澳ふ猫児を下ーね其ハ折俺大るぶ亦小るぶ順風をもく。蚰く那澳へ推のて遣ん。徒而其詰旦称明の時候よりて俺又猛烈ぶ順風を起ーく。敵を火攻ふ便宜を汐させん。其の餘のハ前ふ示ぶ如ー。ぶ疑ひそ勉めよかー。と言諄ぶ宜示せば。憲儀額衝ぶ阿と答く示教ぶ。ひぶ退りく寡君ふ反命せば。さぶる歓びのぶ復て見参せけれと告別ぶ身を起ーて山を下り馬を早めく五十子の城ふ入る。来り。隨即前條の趣を送るく。ぶえ上ーば。定正いよく信仰ーて。兎毛の杪ふ置く露許も

敢疑ふ心ぶく。然らば疾艦汰ーて。這曛昏より諸軍兵を分ち載まふて。よりめれと。詞急迫ーく下知まれば。憲儀ハ唯々とぶりふ答て。躬く退り出く。其隊毎ぶ隊長ふ下知を伝ぶく。ぶるふ冬の日ぶれば短くて。夕陽西ふ淪ーり。士卒ハ反て准備ふ遑ぶく。左右ぶる程ふ七日の月の没る時候ふ。五十子の城内ぶる。将帥五萬の軍兵まで。皆悉出盡て。陸を離れ水ふ就く。柴浦より大森まで。海上遥ふ見亘せば。無浮めぶる千百の戰艦ハ布儲ぶる。某石の像く。五彩の旌旗八色ぶる。戰幟ハ。夜半の浦風ふ閃めいて。緑波も寄せあへぬ。晃々とーて。星影ふ光を爭ふハ。千鋒ハ神代のむー。早蠅成ぶ。魔軍降伏天泰らけいぶ。例もかくやと負ーく。思ふ無心ふ勇ぶ。秋ハば寄隊の大軍ハ。子二刻の時候よりて。衆艦漸次ふ漕出ーく。三浦を望く走らぶる。第一番の先鋒の頭人。大茂林小彦和中と。濱川小渡鋏。久ふ新附の海賊の頭領

水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範を副として其隊の海賊と倶ふ五千餘名巨艦四五十艘ふうち乗こる第二第三の隊い小幡木工頭東良士卒相従ふ者五千餘名大石源左衛門尉憲儀士卒八千餘名有名の兵頭是ふ従ふ者勘くなし第四番い定正の長男上杉式部少輔朝宣を副将として武勇の老兵昵近の青侍華美ふ櫻甲こる者一百餘名雑兵と倶ふ一萬二千餘名こる第五の隊い總大将扇谷修理大夫定正隨従の兵頭箕田源次兵衛后綱信城左衛達頼九本佛九郎望洋城峰麻生介廣原是光と宗徒の隊長として従兵二萬五千餘名總軍五萬ふ餘れる千百十數箇の巨艦ふ真帆陽く白浪ふ轔る舵の响篙工们ふ謌ふ棹の歌皆野千玉の夜を犯して衆艦三浦の澳邊ふ造るよ豫風外道人の契り一風術差ふとく猛可ふ順風吹起りく投方便宜へければ舵工等い

都て烏夜よ恐ぶ又蚤く三浦の澳ふ到るふ武田左京亮信隆い艦を出ふ最遅けれい始ふ遠く諸艦よ續くも胡意遥ふ引下る那身い隊兵のこを打く艦を寛く行後れさく浦河の澳ふ猫児と下る風の便宜と候こりふ定正朝宣いこ諸艦の隊長士卒ども波上の暗ふ紛れく是を知る者こりけり然い寄隊の諸艦い既ふ順風ふ吹送られく其の暁寅の初刻ふ風く三浦の澳ふ着く衆艦都て帆を縮し猫を降し相歌く風外ぶ約束の順風の亦復吹起るべ兆其天の明るを候ふけり開ぶ中ふ仁田山晋六武佐こる敵の戰艦を燔盡さ兆火藥の頭人こりけれい柴薪焔硝とヨヘく積載こる二三十箇の快船を堂り旦千代丸豊俊の保質こる老婦人音音と豫り守く前日より柴浦ふ在り有ふ這晋六武佐い其性酒を貪りく且酒癖ありけれい當役を兼一日より過失ゆくを怕れく絶て酒盃を採る

とるるゝふ既わく。十月七日の下晡ふ造りて同船るる隊の兵ふ向ひくゝふ
ゆう。我ゝゆゝ洲達も連日勤務まるゝけれども疲労るるゝん既ふ是今
宵真夜半ゆ大将御艦を出させぬゝ人も我も従ひまりて死活の境ふ赴くふ
切く嗜る酒ゝとも思ひの隨ふ喫ぎもあらず何をのくよく胆さん肥ゝ宅眷を
忘れて死地ふ就く忠戰を致さんや。あの故ふ我既ふ奴隷毎ふ吩咐く其頭の
准備もるくるゝ先ゆ和郎ゆと献酬あく。醉を盡ゝて鮮纜と等ゝとるふを
大家うち呼てをい辱死御討ひふゆゝ然ゝば御酌仕ゝんゝ長るる間ふ奴隷の輩
ゞ。酒を温め酒菜を出して殺を排る船の内るる客の間特ふ陝ければ音音も
膝を並べく居り當下仁田山晋六ゝ盃盞を執抗げるゝ音音を見くゝ合笑て
昔い知らぎ。今い是枯樹ふ降まる雪の白髪額ふ寄る波濤松柏の肌膚ふ
ゝを思へども酌い婦女子ふ極れり。是師ゝよと指出せば音音も倶ふ微笑く。

嗟夫御見出ふ與りまつゝく。恥くゝを佐るゝれ足駄の端緒ふ敗高素ゝも時の用
ゆい達ゆゝ相応ふかゝ聆娘役梅ゞ香るゝ枯野の密房非如刺とも
甲斐るゝゝを不甘る喫ゝめされゝと戯れるゝゝ十分ふ師ゝも溢さぬ老女の面煉ふ
大家ゆゝとうち呼ゝて受け流ゝ行更ゝ現是酒い狂藥ゆゝ礼ふ始り
乱ふ終る武佐素ゝ強飲るふ隊の兵も咸高量ゆゝ呑ゝ死大蛇の如く
刺ゝ恰も蜂ふ似るふ音音い喫ぎ。よく提撕く昔採る杵柄の哭音謡ふ
あるるゝふ與を添ゝる早歌ふ舌も達らぬ武佐ゝ倶ふ衆兵乱醉ゝて艦ふ凭
れて反吐を突くゝ額を敲ゝく呻吟くゝ。艫の間ふ侍るゝる。雑兵奴隷舵ゝ高
師ゝ鐏を敲ゝく足るゝゝを知らぎ。殻を空縞ゝ好ゝるゝを思らぎ。比旨悉醉
臥く。喚べども応へぎ。掖げども起ぎ。死人ふ仁田山晋六ゝ既ふ日い莫春れ更闌て
主将定正の衆艦いゝゝ已ゞ與る火茱の船も皆定正ふ従ひて倶ふ漕去

志を知ざれば。獨武佐ゞ無くる船の。舊の侭ゝ柴浦ゝ在り。只音音のみ醉ざれば。枕を乱して熟睡をあくる。武佐們を相て嗟嘆ゝ堪ず。肚裏ゝ思ゝ。這仁田山晋六武佐ハ六稔以前戸田河ゝ我児子弓。故十條カニ郎尺八ヲ。を害して。仁田山晋五ゞ弟ゝ。大石親子ゝ仕へぬる二代の權宰と。ゝ人の噂ゝ。多知り。然らでも這奴ハ火藥の頭人自家の爲ゝ害ある者と。這奴ゞ預る火薬の船ハ方僅寄隊ゝ從ふて。ヨヌく漕去りれども。時ゝ臨ゝ。這奴ゞ存ぢ。敢火ゝ頭人。急故ゝ。先ゝ。ゝる火薬の船ハ。必便宜と。喪ん。然ばとかくまでゝ醉て睡アー晋六。ゝる。と。醒ーも果ず。刺殺さば。姥ゝとも。武士の妻ゝ。似げ。ゝと。人や。挾せん。要ゝそれと。尋思をあく。掛豆ーゝる張灯の光ゝ。就て。船床ゝる。鉄砲一挺悄と。引よせて。火線を。合ゝ。火を移して。見れば。這鉄砲ゝ。両丸さへ。竜てあり。ゝる。究竟と。開ゞ。伏ゝ。右ゝのゝ。ゝ引着て。臂近ゝ。ゝける。長盆ゝ。西復ひ。隱ゝ

今更ゝ。裏ゝく。胷を。推鎮めくも。果ーなれ。くそ。その。物思ひ。曳る。單節。妙。真刀。自ゝ。鄙ゝ。別まく。城内ゝ。捉竜ら。ーー後の事。安危。什麽と。人。ゝ。訪ふ。ふーとくも。浪枕。身ゝ。浮。舟の。憂ゝ。ける。両間の。愛孫。へ。ゝ。我使ハ。今も。悉ゝ。犬江腋子と。共侶ゝ。枯れ。ゝ。冬野の草。枕。旅宿ーて。尚京師ゝ。在。狭と。思ふ。のみ。南末。與美の。甲斐ゝ。別ゝ。ゝける。ゝ。我。今。宛。家の。覚ゝ。俟く。計るゞ。如く。船を。焼て。脱ま。去るべ。暇。ゝ。我身。も。倶ゝ。火。煽ゝ。ゝん。そ。ゝ。両。館。莫大の。御恩ゝ。報ひ。ゝる。光の。命を。惜んや。ロハ。両個の。孫。両個の。媳ゝ。別ハ。鴛鴦の。剣羽や。竟ゝ。水ゝ。身を。果。過。世ゝ。そ。とへ。へ。ゝ。品。打。波。濤。ゝ。ゝ。だの。雨。も。無。氷。ゝ。ゝん。冬の。夜の。浦。風。寒。ゝ。群。知。鳥。慰。めせ。ず。友。喚。ぶ。聲の。往へ。方ハ。何。処。星。光。り。天ゝ。餘。波の。銀。漢。俯。仰。瞻。ゝ。點。頭。く。夜ハ。丑。三。剋。を。過。ぬ。ゝ。けん。這。白。徒。ゝ。ゝ。ざ。醒。ず。や。疾。々。覚。よ。と。思。ふ。と。言。ゝ。出。さ。ず。咳。くの。ゝ。叔。雪。と。て。

俟つ長夜ふ蠟燭將ふ竭んとする頃や。船ふ樹る張燈の火光小暗くなりけり。然がりよく更闌て霜氷る夜の潮風ふ吹醒る武佐們い稍明るとあるの時候。咽吭渇て睡り覺て。俱ふ頭を擡げて。四下を見るに。うちふ敬駕して。あるいふせん鈍かの御主君尉殿の御船いやゝ雨館に無船もしくて。洲崎へ推寄せのひけん這頭ふ一箇も艦なく。なりぬるに。越度を致しこと。悔て頭を擡くもありしを武佐噪がぬ深念そして聲苛めく喚るもう既ふ時分を失ちく。御伴ふ後れる越度い勿論越度なれども。然りとてかくて在るべきふあらず。先疾船を出さんやと焦燥しけふいそがせば。高師們が稍覚て。何と応へく遽しく帆を揚げ纜を解く程ふ武佐い又一二の小頭人を身邊へ招きよせて。呼くやう。我今即処の計あり。期ふ後れる分説ふ。那保質の老女奴を又蝕く殺さふあくとうとふを。こゝらの小頭人ら訝りて。汗い又何ぞの故るやと問へば答て。然がとよ我今船を走らせて。

御艦ふ赶着なりく。禀さんやうい臣ら御伴ふ後れるーい中途ふ禍事あるべゝ其故い前日臣ら那ふ預けさせゆいる那千代丸豊俊が保質の老女奴を。里見の間諜児るりけん隙を覘ひ胆太くも臣らを刺ちくあそけるを搦捕んせる程ふ支黨の五人數十名。忽焉として快船ふ乗走りて援け歩つ。這方の船ふ乗り移りく老女を帮助く戰ひ。臣ら並ふ隊の兵ども力を勠せ奮勇して敵を漏さず殺沈め。老婦を擒ら捕りのひ必這闘戰ふ時移りく今ふ及びひ兇と実ぞやふ哄禀して首級を実檢ふ入れまるべ必遲参の御咎を免るゝのみるらで反く御感ふ干らん這説什麽と悄やふ其計較を告る程ふ船ハ柴浦を漕離れて大茂林濱の澳ふ出けり。登時件の小頭人毎ハ武佐が奸計を皆听訖り額を分ちく。俱ふ憶ぬ舍笑て。ハ最奇妙なるとを奏して後方と見るへれば音音ハ聰く其機を猜して准備の鉄砲。含るもそく。

音音身を慾して
仁田山が柴薪船を
燔く

銃口其方へ推向けし雄胆魂氣聲悍やかに若們驚き噪ぎなせそ伐価は既に
叫知たり今武佐が奸計は反て是我実情も我を誰とか思ふらん畢竟に戸田の河
邊にて武佐が兄仁田山晋五が緝捕の手兵と血戦して竟に戦歿なりける
十條力二郎尺八が母犬山道節が舊老僕にて今は里見殿の家臣なる姥雪
代四郎が妻音音は我ぞ武佐汝も寃家の半隻思ひ知るやと明々地に名告
被んゝ鐵砲の火蓋を鑽々に撻と發せバ那時遲這時速武佐はよく驚慌て
立まくなりける程もなく吭を撲地と撃ぬかれて叫びも果ず仆れけり吐嗟となら
隊の兵毎は音音を擒捕んとて權稠篭る間もあらせず音音は鐵砲合
更して船の内に積措れける烏裏の火薬に擲ちて身を仰さまに艙より海へ水入と
飛入りける其水音と共侶に火線の燧児許多なる烏裏の焔硝に燧と燃移る
這時速し猛火激烈威勢迅速現百千の雷霆の一度に墜るに異ならず

人はあらぬ柴さへ船さへ一瞬間に焼盡されて遺るは僅に船底のみ水に漂て音音も
恙はなしや。あり磯瀉渕りぬる死活の海の水澪の建られぬ跡なく成ぞなりける。

第百七十三回

数艘を借て大角義武を拴む
降旗を建て豊俊定正を愚にす

却說犬村大角礼儀は那日の早天に五十子の城を立去りて先谷山に赴きつ
、大法師と商量して隨即所從の雜兵二名を安房なる洲崎の陣営へ遣
して那籌策の成りるよしを犬阪毛野に告げしかバ毛野がかへり來ぬるを俟んとて躱く
相模路に赴きて便宜の浦邊に在りし程次の日の夜に至りて両個の使の雑
兵と俱に堀内雑魚太郎貞住なる隊の兵三百餘名を領て快船にうち乗
りて約束の浦邊にきつ犬村に對面して則義成の密詮と毛野の意衷を噂
し傳れバ使に建ける雑兵なり。毛野の回翰を含出して先大角に呈閲し且其反

命を負ふ也。是ふ由り大角い其言を听其書を閲して。貞住ぢ乗り快船い安房へ返して一箇も留めず。隊の兵々皆東西へ分ち潜せり。水戰の日幾候ひ程ふ既ゆて大角い洲崎の陣の事の光景及犬阪毛野を軍師ふ做さまと。自餘の七犬士い防禦使るる。並ふ大角も賜る。御大刀を現八ふ渡しふ犬飼い犬塚と共倡ふ國府臺ふ敵を候ひ那地の防禦使るるとく毛野が是を與りて。權且藏措ちーと則今番の便宜をもて。堀内貞住ふ是を遞與して。大角ふ傳へーる。大角い其君命を兼り。這賜を受まる。其悅びのべうもあらず。又只是笑のみのこるそ。犬塚信乃犬飼現八ふ。東辰相杉倉直元们と俱ふ義通君ふ俱ーまりて。國府臺の城ふ敵を迎る。又犬川荘介犬田小文五吾を。彩德口ふ出陣して。俱ふ敵を候ひと云水陸の隊配この餘の事千代丸豊俊ふ彩いまる。毛野が反間の計畧。又這密策ふ預り。浦安牛助友勝。音音曳

て。ひとよ。まつ。ちん。多單節妙真の敵地ふ赴ーる。是時。其ふ。ぢえーる。大角深く感佩まで。貞住ふ悄語く。ぢ。吟くゞ如。い這一策へ則是苦中の苦ゆて。危ーとも最殆。る故何とぞ。音音妙真両媼と曳。る單節女兄弟が千代丸豊俊の。密使と偽唱へく。柴浦へ至りー時定正必保質ゆく。件の四個の婦女子を城内ふ留め置くべ。倭而水戰の日ふ至りて定正燒れて敗績。とも。脱れく五十子の城へかゞ來い必怒ふ堪ぢーて。音音妙真曳。る單節を戮さるとを。ぢんや倭れが犬阪ゞ計る所則自家ぢ勇婦四名を售て。徒其死地ふ入るのみ抑又危ぢ。ぢ。然りといへども。曆日ふ危をりく黄道吉日とを事危ければ必慎む慎む時い。失寡ーー。大阪ゞ理と知ぢーく。叨ふ苦計を。ぢんや因ゞ又なるふ犬阪一舉ふ敵と破らば。逆ゞ追ひく五十子の城を拔ぢ。段ゆて。ゞ苦計を。ぢふ。ん定正城ふ入ることを。ぢ。城兵防禦ふ他事なくい何人ゞ亦暇あく。四個の勇婦を害

せんや。已に知り又敵を知りて。大阪が計る所。必や違ふべからざる。非如他の及ぶべも。我も亦水戰の一計に與れり。然るを四個の女流ばかりも軍功及ぶべき二の町ならば生く安房へ還るべからん。後の思ひ出にの義をもろ〳〵なれと告る意衷に貞住に有理々々然しも然もと答く感嘆もちける。是より大家影を隱し跡を埋めて俟つ程。十二月七日に做り〳〵べ。大村大角礼儀に堀内雜魚太郎貞住と共に伯耆国に身を固めて。隊の兵三百餘名ゐて。新井の海邊に赴き貞住と隊の兵を分て。俗に這黑在りて。即大角に。その宵初更の左側に雜兵十名許を從て。新井の城に赴き城門を敲き。喚き呼是に今番肩谷殿へ新附する野武士の頭領。赤品百中と喚做す者。年来足柄多武澤に住る。同志の輩を駈集て。明日の水戰に找て先鋒とせんと。その義前日山内殿より。當城へ通達せられ。こん顕定主の付契に在り。その義禀一度。とそ喚門ひける。當下門衛の士卒是をうち呼て。応と答ふ。

左右に容れず。即門卒を走らせて。徒と注進せんければ。這新井の城主なる。三浦陸奥守義同。うち呼て。その義の隊山内殿より。諜し合されてければ。今疑ふべくもあらず。然いとく。今の世の人心由断せば後悔あらん。咱先對面して其付契を相く艦を借せべ。率よ兵毎其赤品百中と伴當一両名。あと門内へ入るとを饒しね。必由断もべからざるとのひて。身甲の上に猟衣烏帽子を着裝ひて。小刀を腰に跨へ。力士三十名許を從へて。委関に歩程に近習の燭を秉て先に立ち。大刀を執て後に跟く。小心者に用ゐられけり。介程に護門の士卒は君命の趣を。大角に伝へ示して。那身と伴當一両名を角門より裡面に入れて。委関に案内を。當下大角阿容る色なく。引れて委関にうち登る。黙し連れ燭台の見えく星に異ならず。上坐の城主義同。発児に尻を撰く。左右に侍る力士は。狼の如くに見えて。蚓の像くに疾視へる。面魂凡庸ならず。近習は主の後方に居て。

も本事ある者あらんと見えざるかりけり。既ありて大角が程よき処ふ跪くを義
同みづから聲を被て赤岳百中とい和郎ありやと問へば大角額擦れくる頭を抬げて。
然いひ顕定主の剛せめり。借船の符契ふ在りひらぐ戰艦十艘と焔硝
柴薪を借まく欲もふの義を仰付さるべと乞へば義同點頭て。その義い諾ふ
ろろ。和郎の隊の兵幾名ありやと問へば答く然いひ同盟の每い三百餘名
いを。近く海邊ふ留めく彼て来ぞ。小可が伴當へ僅ふ是十名のみ夜分の悍ら
あれいと。とのひく聊退く。躰て鎧の懐錠より符契を舎り出て一個の
近習身を起しまく。把て主君ふ呈覽あるを義同やとう受舎りて。近習ふ
ふ燭を抗さて。懐よりまく隻符を出しく自他合せ見て相違なしと獨言
ち符契を藏めく又大角ふ向ひくいやう。持参の符契ふ疑ひなければ敢異
議もべくもあらぞ。艦へ昨日より准備さてく。焔硝柴薪と共ふ遠うり馬頭

上ふ在り。旌旗水幟い甚麼ぞや。と問へば大角。然いひ其二種い扇谷殿と。
預けあるりひく。を相携くいへ只御艦と柴薪をのみ貸しあらぞ物足り
てんと。推辞を義同少あへぎ。そもそもその准備あるべけれども我艦ふ我水幟と建ぞ
きそ人ふ貸さえや。且愚息義武い項者風寒ふ感冒されていまぞ病牀を出
ねば。両館領家の催促ふ従ひまるとを。ぞ他いかもえ我さへふ送憾る方なた
のみ。義武ふ代るべき勇士なければ黙止あふ和郎今我艦ふ乗りく先鋒ふ
找むてそ幸ひ我も亦両三個の兵頭ふ雄兵四五百名を授けく。倶ふ戰ひを
帮助くべしとのを大角推禁めく。ふ然る故もいかんぞ。小可今番両管領の
ん為ふ死をのく敵を敗らまく欲まるふ。今ぞ他兵を雑へられんい素より望
む所ふあらぞ且小可い扇谷殿の先鋒ゆく。當家の加兵ふあらざるふ縦艦を
借るとも。當家の水幟を建られんいも亦事の宜ふあらぞ。這理を思へ

大角謀く艨艦を借る

ゆゑぞや。と氣色を変て論ぜれば。義同一霎時沈吟して。実ふらうれぞ其理あり。和郎一器量微りせば。這席上の孤客ふ〻く我ふ對ひて徒ぎぞふ。意表を送さを論ぜん。武勇ふ顧て望ふ任せん。疾々退りひへとく。躰て士卒ふ吩咐て准備の馬頭上ふ送らるれば。大角面を和らげて。斉らふ赤くひ呂郎君の御次安を猶も御保護あれ〻と口誼を舒別を告く。外面へ退り出れば城兵五六名。蕉火を振照し。犬村主僕を角門より出おく。馬頭上へ送る程ふ堀内雜魚太郎貞住ハ二百個の隊の兵と倶ふ甲夜より這頭ふ俟て居る。這海濱ふ維ふて。新井の戰艦ヨヲ陪中ふ両管領の需ふ応ぜる。准備の艦十餘艘。其一艘ふ。焔硝柴薪さへあり。を。船小屋より番卒出て大角ふ遞與せ。ば貞住も共侶ふ欵びを述受含く。其艦毎ふ士卒三十名づゝ分ち乗せふ。各各携乃来る弓箭火銃器械あり。且楫を含る。艦を操る。舵工さへ匿し。かくされば渺茫る大洋の間ふ迷ぶ。齊々と艦拍子揃へて漕出て。夜のまぶ丑ふ過ぎぬ。有低一程ふ三浦義同の獨子ゐける。三浦暴二郎義武ハ。今宵も尚病林ふ無公龍く在りける。件の事の趣をうち聞て。送恨ふ堪ねぞ。横児撞遣りて身を起ゐて。枕方近く惜せる。鎧を含く。身を固め太刀を佩ふ一具ゐ。兜を看病の女房ふ持せ。走りく親の身邊ふ寄く。跪くを。暴女ふ奮然として。亶ふ宜ゐ。當家ハ是人も知る。両管領の親族ゐるふ。今番の戰ふ値ざるハ。児ゞ病着の故ゆ。是非の及ぶ所ゐれども。赤品百中とう喝ふ做る。相模野武士ふ先を駈させく。我艦と貸て乗せゐ。ゐより一隊の軍兵をぞも出し遣りゆゐざるハ甚麻ぞや。今より艦を出させく。海ふ浮む躬方の大兵と。ゐ。ゐく明日の先鋒ふ拔ん。暇亶きとゐも既ふ立まくゐくけるを。義同急忌ふ喚禁ゆく。ゐれ義武和郎の送恨ハ然ゐとゐ。身ふ猶熱邪を

帶るふ。夜を犯し海ふ浮きて。暴虐潮風ふ吹冷されるば寒熱忽地再發して。大刀拔くこも克はぬ。狗滅を做さんのみ。とても勇士の本意といへども然ばこの回の鬪戰ふ我が伊勢長氏の獸と成て出陣を禁められ加兵ふ親族をもて名代ふ出せとある。重役なれば非如その義ふ及ばぎども後ふ外ならぬ所べし。已ねくと窘きこば義武聽ぎ推返して。不古我身との曛昏より熱邪退ぬと覺しふ今ぞ心地清ふるふるぬ。縱病着復起るとも武士なる者ハ百萬の大敵と血戰して命を其首ふ捨てこそ名を後の世ふ揚げもせめ。浦團の上ふ起臥なる婦女童べ蒙ふ看病せられて。死なるを本意ふ做ぎべやいでもあらんとなれども。當家ハ平氏なりけるふ上。移氏より養嗣せられて。本領安堵なるこ。両管領家ハ親族ぞ。藤原氏の血肉なるふ。這回大事の鬪戰ふ不知出処の野武士們ふ艦を貸たるのみふ。阿容々々として出ぎもあらぬ世の胡虜ふなるんの義なりハ饒さぞぬと。詞烈しく答も果ぎ。衝と身を起し外ふ出く。急ふ隊の兵を召聚るふ。惴雄の壯士なるハ。今宵出船を怨きく。倘兵頭を出さるこ。とりやあらんと思ひしこば甲夜より各甲冑をく。戰飯ふ飽ぎる者なく。今かくと俟つ折るこば。這武者汰を笑くとなる隨水崎蛋人甲良亀九郎。小磯真砂五郎など喚做こる。兵頭を首ふ。ちるる銃る前後を乱さる。雄兵都て一千有餘城の玄関の頭より正門の内なる翁城ふ処陝まぐ聚合こば。義武ハ忻然と。鑣奴なる牽寄来る馬ふ搖哩とうち跨こ海邊を投さいそぐ程ふ。又是准備の戰艦なるふ二十艘維ぜくあり。番卒毎出迎こ。艦ふ柴薪焰硝を舍入れく。水懺を配建なるこも。當下義武ハ其戰艦二十餘艘ふ隊の兵五十名々分ち乘せて。其身ハ胡意快船ふうち乘りて。大角の赤岳百中と逐まくも。頃ハ十二月八日の曉天なれば。渺々なる大洋の波瀾鳥くして。星影移らぎ。刃成も寒風ふ面を撲こ。諸軍兵ふ並て

憶ぢ戰栗る。肌膚粒竦色蒼然く。身ハ生るがら。鮫児ぬるらんと思ハ可ふ堪ぐられば。弓含る矢ぢ砺ら〳〵如く。其弦凍て断るもあり〳〵と。獨去の艦隊の主將る。三浦暴二郎義武い今茲十八歳の少年るれども。武勇力藝。親ふ劣らぢ。勇ハ萬騎ふ敵ぢべく。膂力ハ千鈞を挙るふ堪る。遽莫今宵ハ病後ゆぢ出陣。心許る〳〵と思ねもるり〳〵ふ幸ふ〳〵去の曛昏より寒熱共ふ瘧り〳〵。氣力衰へねば。夜風の烈〳〵ぢを物とも せぢ。疾百中ふ赴着んぢ。連りふ舵工をいそぐぜけ。然ば又犬村大角ハ。有徳るべ〳〵と知るようもるく。既ふ義同を欺ぬ〳〵。十箇の艦を借ふく。漕出せぢ。去向をのぢぢ。堀内貞住と。船を並るく。程ふ那城内ゆくあり〳〵事の趣。城主三浦義同と。問答詰論の顛末。悄語々々告知ぢれば。貞住以下の老兵まぢ覚ぢ。俱ふ含笑まて。愉快のあとぢ稱えけ。浩処ふ新井の方より。漕ゆぢ来ぬる快船あり。忽地ふ聲と發て。

其首へ漕ゆく衆船ハ。野武士の長と覚えるる。赤品百中もあるるぢ。偵ぢ我ハ三浦陸奥守義同の嫡子るる。三浦暴二郎義武るぢ。權且艦を止めよと喚ら〳〵近づ来ぬれば。大家驚く中ふ。大角ハ見るく。毫も噪ぐ氣色るく。然べ赤品百中ハあるふ在り。何ぢの所要ぢと。答る詞も果敢ぬ。義武の快船ハ。這方の艦ふ漕よぢく。其隊の兵ぢ。鈎索ゆぢ曳寄せ。撫留ふ程ぢあるぢ。三浦の伴船二十餘艘。水崎蛮人甲良亀九小磯真砂五ぢ。追風ふ儘せ。推續ぢ来く。犬村ハ十許艘の艦の前後ぢ。捕囲ぢ。一箇も漏さぢ。皆生擒ぢと。撫留めけり。當下暴二郎義武ハ。大村大角ふ向ひ〳〵。やれ其隊の頭人加勢の野武士。赤品百中ハ和郎るよ。我名ハ豫ゆる。我ハ親の名代ぢ。疾五十子の城へ参るべ〳〵ふ。憶ぢ風寒の病着あり〳〵。出船遅々して。今ふ及べり。和郎ハ新附の加勢ゆく。我艦ふ乗るかふ宜く。我

隊に従ふべ〜と威勢猛く宣權を。大角嘲て冷笑ひ。開い謂るを爭ひ
るべ〜。咱等い。毎る日五十子の城内に。水路の御道導児こるべ〜と定められ
ゆの者るに今作ら他人に譲らんや。這艦い三浦氏より出されしうとも我私に借こ
るにあらば扇谷殿の處分に。課く所要に充べ〜則是扇谷殿の
船に同じ。然るに這艦に乗れば。和殿の隊に隷けといふ。管領家をも
憚らで隊に従へ。欲張年少〜とも遠慮るべい最烏滸人と。君れば義
武満面朱を濺ぐ。怵難る聲高に。いまれがとそ舌長〜軍神の血祭に
首を捕んと覓期せよと刀の柄に手を掛るを大角猶も怕る色なく。非
理の亡則ゆい道理る威勢をもく克まるや。和殿腰に帯剣あらば我も亦
身を護る是この刃るにあらば已とゆざると云い敢敵をと撰まるとも一朝の
怒に其身を亡ぼ〜。是君子の慎む所。小人の悔る所〜然るを和殿事を

好むい。敵に反忠まるにやあらん。里見を攻伐ぎて同士鷸を做さるべ何を
りく管領家に忠とせん義とらん。然る狂人に敵るにとらせも果に義
武い衝と身を起〜て艦に脚踏機々大角を斫らんと叫ぶ聲と共に刀を見光りと
拔放せば左右に在りける老兵毎吐嗟とだり推隔く。抱に禁ず諫る程に猶
且這隊兵頭水崎蛮人小磯真砂五郎も。義武が怒を言る其詩聲に驚
く。船を治ひ移り来て。倶に義武を諫る。那赤品百中が過言い憎くけへ
ども他も亦管領家の御隊の兵でいに同士鷸を做されるべ非如今番の闘戰に
御軍功あるとも後難免れがたう侍べ。枉く饒させぬひと理り切に和解をば
義武い老黨の意見を聽ざるに。うち頷ぎて退く刃を鞘に藏
ども尚理らぬ怒氣と共に口い諄々と罵りけり。話分両頭。その日十二月八日の曉
天に扇谷定正の諸軍船い三浦の澳に猫児を下〜く風外道人の風説を

の。起き順風を待ち程ふ幾千の艨艦ふ横亘しる張燈い波を照らし水ふ映して。魚敝亀もあくわ寄るるべし。浩処ふ洲崎の方より。快船一艘漕ぎ来り降人と書寫しる。弦樹張燈を指抗くうち振りく喚るを。旦足いるを安房の降人千代丸圖書助が密山使わく。濱縣馬助と喚ぶ者ん火志の言上あるをもく。いくぐ直訴ふ欲さ。あの芙を凛しゑとふ設聲共侶ふ近つくを。扇谷の士卒小舸わ乗く出迎へく鈎留めて。引て大石憲儀の艦の邊ふ牧くもを。伝と注進をければ憲儀則水幕を抗さをく出て濱縣馬助ふ對面を這馬助ハ浦安牛助友勝ハ當下友勝が部ふ豊俊隊約しまるを如く。今日あも旦朋の水戰わ豊俊里見の衆艦の背よるうち起りて火を放ちく。剱わ走べし。但しその折乾の順風の最も烈しく吹沿ひ。豊俊が放火い里見の衆艦ふ蒐らぎして向火反く我艦を焼ん。然れば豊俊い里見の衆艦を

漕脱て逆く又蚤く火を放さん。その折御艦を找めさせく。俱ふ火攻をあ。全勝十二分ふ成べし。この芙を諜じまく為ふ復こを推参仕りぬと実しやふ説瞞まば。憲儀听く黙頭て。躯く小舸わ乗移りく。引て定正の艦ふ造りく。件の芙沈告しく。定正悦び大くるるぐ。其芙我よくあるるる。疾衆艦ふ下知を伝へく。旦朋の進退を示さべし。豊俊主僕大功あるべ。賞禄い異日の沙汰ふあん。先この旨を答諜あて。馬助とやらンをかへし遣りね。とふを友勝側南して。憲儀ふ向ひて云ふ。既ふ天明ふ程あるうんふ。小可憖ふ安房へ還りるべ。里見の士卒ふ怪あ。あられて。事の破れわ故りふん。縦目今の御答を。豊俊ふ告げぎとも。御同意ふとうまさぐ。事違ふべくもいわぎ。この芙を凛しゑね。と請へ。憲儀又黙頭て。直即友勝の云ふ。と又定正ふ告しく。定正い少く感悦して。現其遠慮も謂あり。然べ其馬助を。憲儀汝の隊ふ隷よ。軍忠隨意るべけれ。とふ憲儀異

議もなく。御諚兼りひしめき柴薪を積る船毎に既に御伴ひへども。其頭人を課る。家臣仁田山晋六。ちかふ参らぜ第一義なる柴薪の頭人なくに不便なるべし。然れば晋六が来るまで。這馬助を代として那役に充ふる便利にもあらめ。その義怎麼と請問へば。定正宣ふ。又鼎頭て。現他ぐ主なる千代丸豊俊に既に放火の頭人。且主僕倶に安房人。波上の掙に自由なる人に。其一役を課るべ。反て仁田山晋六に優さともあらん。退て柴薪船を遮與れと。なほ頷に吩咐れば。憲儀唯々と言兼して船を漕せて退く。却て友勝に柴薪船を預けて其進退を任せる。友勝は思ふに倍る事の首尾の十分なるに笑を忍びつゝ欺び謝して。そのまゝに留りける。左右なる程に絳燻引く東天稍無暁と志ある時候風外道人の約束違ぬ。乾のくに天引る横雲の間よりして。勁風颯と吹起る。激波高く艦揺ぬけば。その期と為る寄隊の大兵寒氣も倶に忘るゝ。ぞ。孰う欺び勇ざらん。素破乾の順風吹出ると。皆疾猫児を曳抗て寄せよと。呼りて伍置を守りて漕出せ。先鋒は則當軍の兵頭。大茂林小彦和中。濱川小渡鍊。久士卒五千名。並に新附の海賊の頭領。水禽隼四郎。緑林錦帆八四九郎。近範其徒二千餘名を左右の副とせ。共に雄兵七千餘名。其艦一百許る。次は晋領四家老の隨一なる。小幡木工頭東良。士卒三千名。次は上杉式部少輔朝寧に大石源左衛門尉憲儀を副とせ。信城左衛逵頼九本佛九郎望洋。是に従ふ其兵一萬餘名。次は總大将。扇谷修理大夫定正。従兵三萬千百十數名。其田源二兵衛后綱。白峰麻生小廣原。及阪東に有名の郡司御士の是に志ある者。勘りて。又降人千代丸豊俊の密出使る。那濱縣馬助。柴薪船を預け。れく先鋒に従ひく找めて。武田信昌の名代なる武田左京亮信隆と新参の

浮浪人赤品百中と仁田山晋六武佐のと中途に障ることあり。秋この時もそも其船見えねば定正を首あく。朝寧憲儀東良等はちく機密を知りしゝ老兵ら今ちら他邦を俟んとく躊躇ふへ死ふあらざれば寄隊二三千箇の戰艦舵を轔ら毋艨を鳴らして整々として前後を乱さず乾の順風に儘せて徑に洲崎へ推寄せて稲村瀧田の城を屠りく義成親子の首を捕んとて勇ざる者なりけり。事の勢正に是曹魏江に浮きて呉を呑まく欲り。胡元海を渡りく東に慰せ日も信やありけん戰世の人の心い死活の海を海ともあらず波に彼岸遠く後の世を思ざるこそ薄情けれ。

第百七十四回　萬里一水道節小仇を射海　八百八人毛野大敵を鏖ふ

却説その時安房の洲崎なる里見の陣営あり。國守安房守義成主昨十二月七日に至りく軍師犬阪毛野防禦使大山道節並に兵頭小森但一郎高宗及諸兵頭老兵と恩赦の罪人故の上總の榎本の城主なりける千代丸圖書助豊俊等を召集へく明日の水戰の隊配を定めらる。印東小六明相荒川大郎一郎清英木曽二助季元小溪目堅宗等も俱に這席ゆゑ與りける。開ゞ中に犬阪毛野い獨君命を兼りく諸隊の前後を配分も先鋒い則小森高宗に千代丸豊俊を副として毛野ゞ謀る所あり。其船毎に柴薪焔硝を積入れる放火を宗とせべ兵與え次い大山道節に荒川清英印東明相を左右の副とも次い軍師犬阪毛野ゆく木曽二助季元是に從ふ從軍の諸頭人の夫名い牧舉ろふ遑あらぬ。自餘の五大士と東辰相荒川清澄杉倉直元田稅逸友登桐良千滿呂重時鮒船茂足東峰春高堀内貞住等い或い陸地の敵を防人與或い悄地に謀を授けて他方へ遣りて中に犬江仁蛯雪與保い京師ゆく

と奏し剰蜜崎照文と田税逸時苫屋景能を重ねて京へまゐらせられば當陣ハ勇士まゐり集り義成も艦を出させ給ふ俱ハ大敵を防ぐべしとあるべき本事なる兵ヨリまゐらねども事士分ハ謀り給へば大敵も怕るゝハ足らじ且明日の水戰ハ君ハ此の処を動坐あらべ反く守衛為くして萬一の時誰かとく陸おうち登る敵を防ん且奸民郷党の野心も料りがたければ猶ハ御陣ハ御坐せて後安くはべけ[illegible]と其理を舒べ諫めしに義成ハの議を信容れて曩ハ水戲水馬の調煉を撿覽の與ハ建させる望洋基ハうち登りて明日の水戰を覩んべしと定めるる折ふし瀧田の城より堀内藏人貞行が老候の使として安危を拜問の與ハ来ハければ義成欽びて對面あり事の由を尋ねて瀧田へ別ハ使を遣はして請せる明日貞行を當陣の一頭人ハ充んとて獨小溪目の明日の隊配ハ漏しゝば痛く望を失ひ思難く毛野ハ[illegible]在下い原是老館の御使を美りて瀧田より參りしかども同僚東峯鮒飛ハ既ハ用ひらるる所あり在下ハ甚麽ぞや明日の水戰ハ俱に故ある狡あるべくと嘶言がましく怨ぎて毛野い听く含笑て否とよ和殿ハ別ハ用る所あり[illegible]ざるべ[illegible]れば其美ハ及ざる耳とよせと膝を找めて悄悄ハ論る明日水戰の時ハ臨て朝風必咫共ハ[illegible]其折和殿ハ五百の雄兵と俱ハ快船十餘艘ハうち乗りて敵ハ啓いで蔦直ハ又独く武藏の河崎渡もべ鮠内葉四郎と雑兵猿岡猿八と俱ハ其故郷い武藏る矢口と欲ハ[illegible]ハ那里の地理ハ具るべ因て他ハと従せん那地ハ届りて進退る固様々と説示せば小溪目い依然と美欽びて退ぬく事の准備とあり[illegible]徳而大阪亂智い大山道節と共侶ハ明日の軍兵を整るハ諸頭人と船長們ハ君命を偽へくハ為い約莫明日の水戰い各ぬる進退あり意ハ敵明の

時候より乾の勁風起るとあらば敵の大兵艦を找めく。蒐直ふ推寄せ来べ。然りとても我諸隊の艦ハ猶皆岸ふ在りく動くべくもぞ其風変りく巽ふ変らば敵を逆へく火を放ゝを要とも勿論館の御軍令ふ隨ひまりく縦勝ふ乗るとそもまく敵を殺せべくもぞ只生拘を全功とも倘違ふ者あらば立地ふ足を斬ん艦ハ今宵柴薪を積載て旦開の戰飯ハ各各艦ふ在く握飯ゑべ。旦纏腰飯を忘るべくもぞあの美ハ天津九三四郎が稲村より来て炊飯の支度ら哉ふ指揮せべけれ事ふ礙滞あるべくもぞあの御旨を心得りと言嚴ふ説示せば大家敢異議する者なく共ふ言義を去ゆる幷ぶ中ふ千代九圖書助豊俊ハ去の日曾嘗児堀内許より召出されく去の隊ふ在り鄉高ふ義成主ふ見参を饒されて旦恩命ハ這回の闘戰ふ大功あらば舊領城地を返ゝゆべと仰らるゝれども豊俊ハ舊臣の浮浪して安房上総ふ在る者いかゞぞあの美を知られば那臭一僕ぞ

あらぬ。遽莫先鋒の次將ハれば面目あるべ。恁而去の夜ハ篝火を焼て既ふ暁天ふ至りく。一隊毎ふ最も堅固ふ備へり。水隊ハ軍兵一萬餘名八日の暁天ふ至りく。一隊毎ふ士卒咸艦ふ乗果く敵のうち寄せるを候程ふ天ハ向明と去ゆる時候より。乾の勁風吹出く磯打激波凄ゝく艦を遣るべ。便宜ふあらねば士卒齊一感悟して果せる哉軍師の先見亳も違ハぬ既ふ乾の勁風發り敵推寄せるふ程ハあらず恁て去の風吹変りて空共ふそなるべけれと思へば都て勇ましき寒風肌膚を冒せと忘れく弓弦を潤しの火銃の丸を龍々敵を俟つ威勢あふ振然くり。尓程ふ扇谷の諸軍艦ふ既ふ去の順風を得く欣び勇ざる者あらば各正帆を七八分ゆく風のまゆく走らまるふ比皆是巨艦なるをゆく猛風洪波

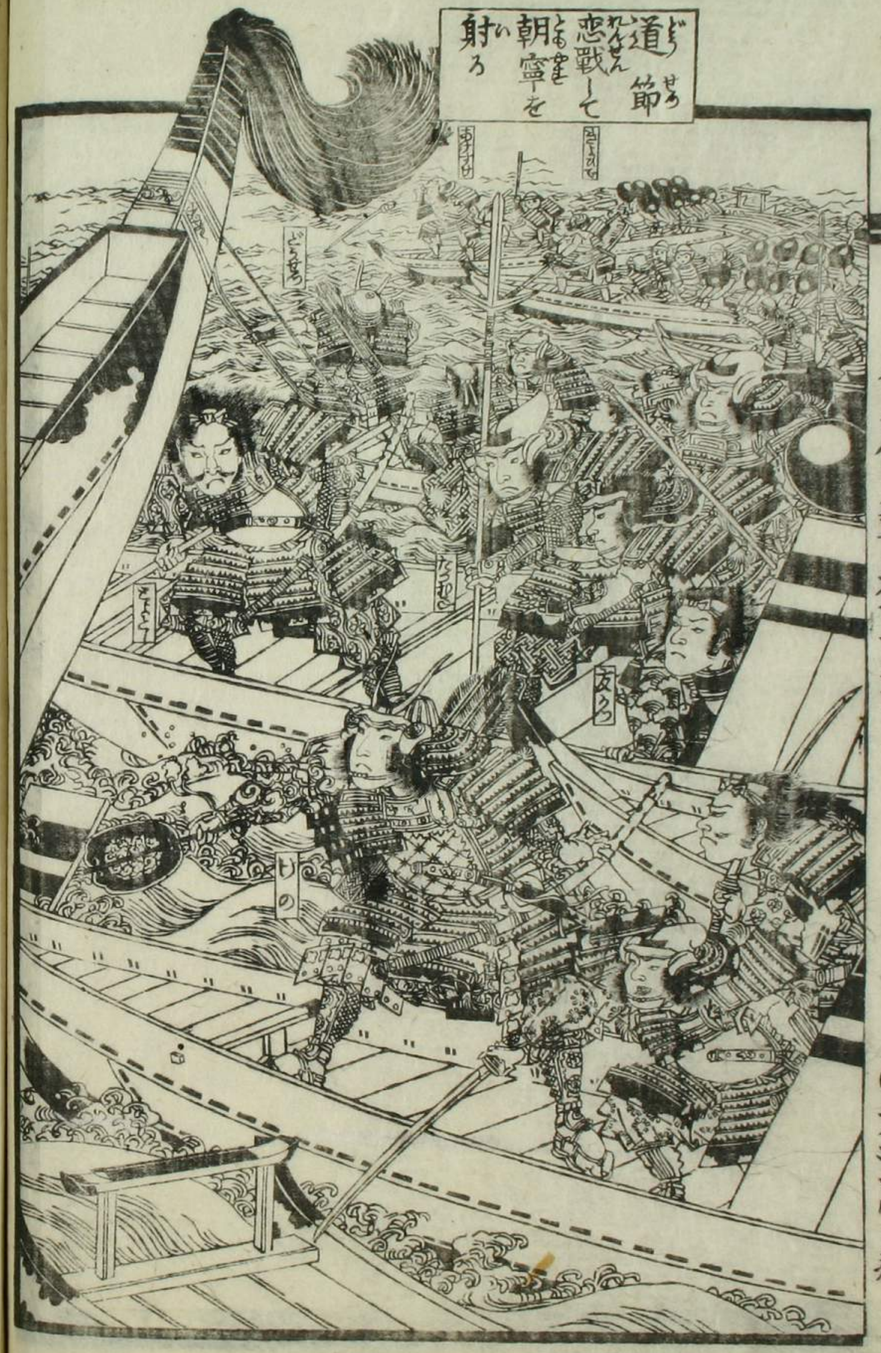
も危ふく見え。三浦の澳より洲崎まで。水路五六里ゐ足らぬれば。今いま一里許のやまべらんと思ふ程忽地ゐ風歇み波理りて。衆艦都て毫も走らぬ。是いかゐと訝る程ゐ其風猛可ゐ変りて。少く便宜を失ふ折ふし。洲嵜の岸より突然と快船十餘艘漕出て。前ゐ敵ゐうちも逆ひぬ波を横ぎり。一瞬間ゐ武蔵のくへ漕去りける。是則別人ゐらぬ小湊目堅宗ゐ。鮠内普栄四郎。狙岡猿八等と五百の雄兵を従へて。目今那地へ渡来りけり。當下軍師犬阪毛野ハ一萬の軍兵一千有餘の戰艦を二隊ゐ分ちて。鼓を鳴らさぬ憾ゐ振らせて。連りゐ士卒を找れば。則先鋒の頭人ゐ。小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊ゐ隊の兵二千。艦二百艘波を開て漕出ぬ。第一番ゐ水幟ゐ降人千代丸豊俊と寫せて。扇谷の先鋒の艦ゐ。大茂林小彦濱川小渡並ゐ水禽隼四郎錦帆八四九郎ゐ。いへばゆゑ。後方ゐ續く寄隊の衆艦大石憲儀小幡東良將帥正副將軍も是ゐ。原来千代丸豊俊ハ順風の便宜を喪ふ故ゐ里見の衆艦の背ゐ火を放つと。ゐねば胡意找ゐて。先ゐ立て。欲然ゐ。そも里見の士卒ハ他を怪ゐ。制る者ゐ。舵を連ねて。近づ来ゐ。故あるとゐ。ゐ。ゐ。疾濱縣馬助と召ぶ。問ぶやと。唱る聲も果出間ゐ。小森千代丸ゐ隊の頭艦ハ。射る箭の像く漕よ。俱ゐ准備の小柴ゐ火茉を夾て。敵の船ゐ投入々々。攻寄ぶ。折ゐ。烈ゐ。潮風ゐ放火の勢。一雲時もあ。ゐ。寄隊の艦ゐ。存る所の柴薪ゐ其火移りて。發と煙立つ程。もあ。ゐ。先鋒の衆艦。免る者ゐ。猛火と。做りて。煽ゐ。軒遇突の威勢。涯りもゐ。且猶浦安牛助友勝ハ扇谷の柴薪と。預りて。先鋒の艦の後方ゐ在り。件の放火發ると見るゐ。同船の軍兵四五名を。斫仆ゐ。又斫伏せて。左右ゐ。船の柴薪ゐ火を放ちて。猶も拒る敵兵。艘中ゐ

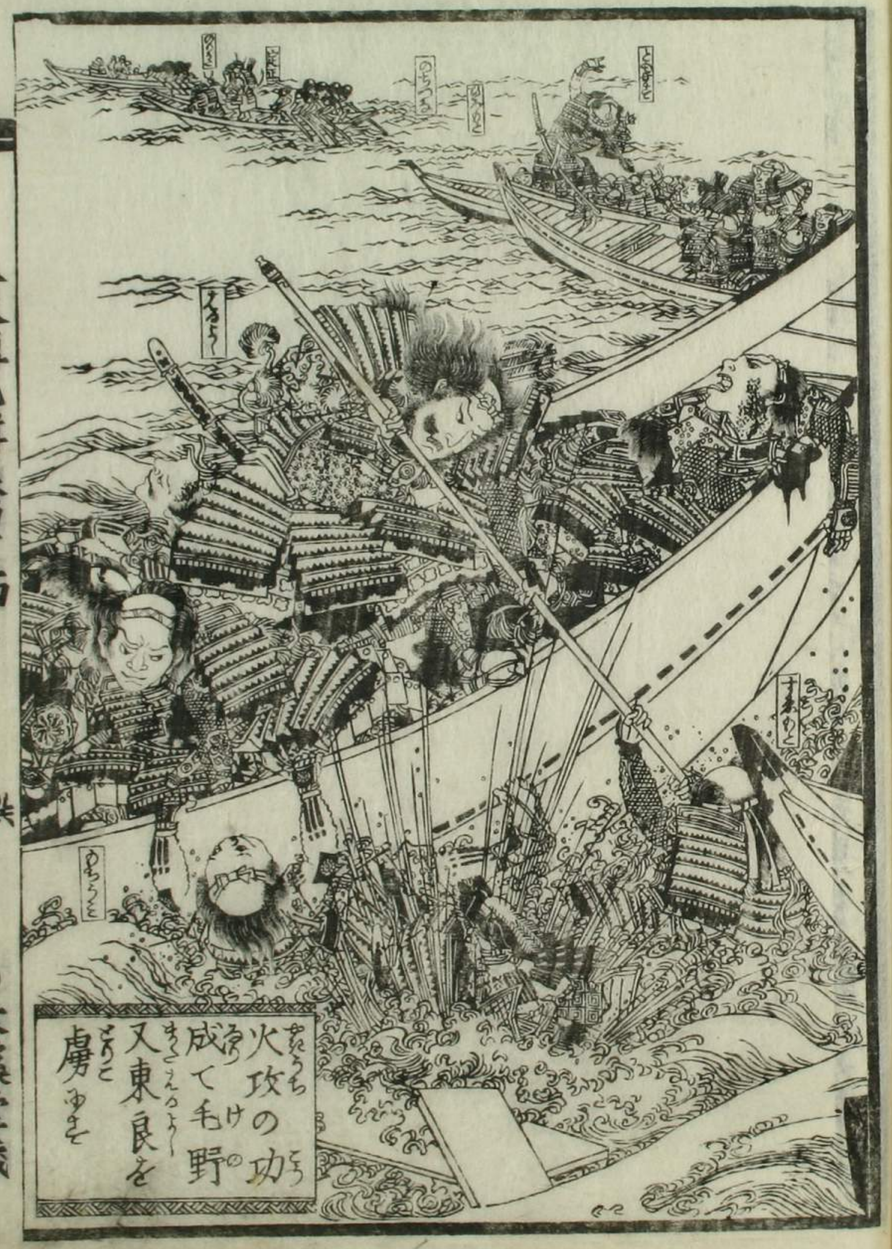
儘せく斫殺す大刀風と共に聲震發て愚る哉定正憲儀寄隊の軍兵皆
聞ね豊後守を敵に降ん我い其舊臣る濱縣馬助と名告りしい実に
らぞ軍師大阪の密策に従ふ。定正を哄しる。実い里見恩顧の頭人浦
安牛助友勝なると知ざるや。若们い是鬼の群鳥這圈套に入りられば皆炙
禽ふ。ぐんのこ。笑ふべしくと喚りつみづからの艨艟を推衝と漕脱く自家の先鋒に
加りて俱に敵を攻撃けり。余程に風火いよく煽て寄隊の艦い一箇として
其爆を受ざるもなしるべ将帥士卒の差別なくこゝろいふとどろふ慌噪
ぶつ。度を喪ひく爆を脱れんと欲りして海に入る者い水に溺れく命を殞し。
然らぬ猛火に身と焦して免る者極く稀なり。開ぶ中に式部少輔朝
寧い心疾に小将えければ又蛇くも艦を漕辟せく風側とりまて三浦のかたへ
脱れ去んとなる程に印東明相荒川清英俱に快船に乗走らせて二

隊の従兵七八百名返せくと喚りく。透もあらせじ追蒐来れば朝寧も近
習外官の老兵皆只い主を撃ませくと。近く敵と斫拂へ朝寧も亦防禦
射く且戦ひ且走る逃るに順風の艦られば明相清英勇る紛れもなく波の上
自由るべく撃る漏走く見えくる折うし大山道節忠與に定正を生捕んとく。
連りに艦を找る程に。見れば落ちく敵船あり明相清英二隊の艦なり。赴
へども竟に及ざりける。其敵の旌旗水幟い是紛ふべくもあらず朝寧なりんと
思ひくべ心のよくいそれく。他い則定正の廃冢子に故主の為に冤家に
羊隻ぢも當君里見殿に是猶敵の骨肉に疾撃を捕らむ印東
荒川噫な寛しと焦燥く且我舵工を罵励せども間遥に遠ければ亟に
迂もつ死が道節即ちく焦燥く那里に落ちく敵の船い扇谷式部少
輔朝寧へと見しい僻目欲恁らい我い煉馬の舊臣今い里見の股肱の

臣八大士の隨一なる犬山道節忠與なるを知ざるや。返せくと喝りく。箭間て言ふ程あれども豈脱さんや。と執る弓ハ三人張ふ十五束三伏なるふ征箭ハ刈ふく。最も易びふ能弯固る箭尖を敵ゑ為ふ波の立る隨ふ眉尖刀引提て見るる処を道節ハ矢聲劇しく彈と射る。射られく朝寧一霎時も忍堪ず身を仰反せて大洋ふ墜まく水底ゆゑ沈ける是ゆゑ驚く其隊の士卒ハ咤嗟とだくりふ。剣児をりく王を極ひ揚んとく。舵を留めくありける程ふ印東荒川二隊の艦ハ波濤を冒ひつ漕よせ来て兼程りく敵を擇ず斫仆す就中明相清英の大刀風ふ中る敵兵あるとるけれ。ヨヌくハ船の内ふ平張伏し或ハ跪ひ頭を敵ひく。命をこ之者尠くるねど明相清英うるゑ矢ひく。ゑ盃の殺生をべくゑぞとて皆悉く結扭せけり。有徒程ふ道節ハ艦を走せ赶りく来つ。這光景を見て嘆るゑ。小六太郎一

开ゑ要ひし。其沒る奴们を降ずとも生擒るとも穀潰しのゑ何ふせん器械艣舵と奪合く。潮のまふく流し遣りね但ゑ困ふせざるべハ我射て隨ず一なる一将ゑ他ハ必朝寧るゑん惜むべし遠箭ふ行しゑ落て水底ふ沈ふけん首を獲ざりし悔しさよ先求獵んぞ求獵ぞや。と詞を急迫く罵ふ。士卒ふ下知して今朝寧の隊ゑる四下ふ剣児を入れて搔捞らるふ水底深くて届るゑバ又小猫を下さるく那亡骸を索求めく引樵さるまく欲るふ流れゑ去けん舩ふ契して剣を求るふ異るゑぞ竟ふ其功あるとるけれ。道節屡嗟嘆して徒と知ゑバ赶迫く必撃捕るべくしふ遠箭ふ行し悔しさよと獨言のゑ士卒ゑも俱ふ慰難くりける。（前巻第百七十回ふ現八箭を抜く。その疵あやまりすぎたるに水死の将を救ふとある段を照し見るべし。）當下明相清英敵兵の器械艣舵と皆悉捉棄く結扭りし隨ふ流し遣る没架船の往方定めぬ扇谷の士卒ゑハ恥を思ハぐ蜻蜓の命生ゑしと欲びて流ふ儘るる


道節
恋戰して
朝寧を
射る


火攻の功成て毛野
又東良を虜
八犬傳九輯卷四

船の内より共侶ふ伊豆相模の方と見且して那見よ遥ふ那里へ向く船を我老館定正とふふを御坐をめれ豆ゑと俱さをめ者とのを道節明相清英ゑて遥ふ佐と相て。原来定正どざゝゑれ疾敷も捕んと。船人公们をいそゞ立てゞ好蒐る順風の舵ふ身ら乗伊豆狭相模狭武蔵野の逃水へとそ逃さてと惱る心を勇れける。案下その日里見の先鋒の頭人小森但一郎高宗千代丸圖書助豊俊ハ浦安牛助友勝と相俱ふ寄隊の前後より火を放ちく多く敵の衆艦を焼ゑーゝば扇谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡其隊も士卒共侶ふ焼れく命を殞さゑるー。然ども寄隊の總大將扇谷定正の大石源左衛門尉憲儀其田源二兵衛后綱白峯麻生介廣原と近習の毎のゝふーて又蝕く數箇の小舫ふ乗移り。疾五十子の城へかゝ入らんとく武蔵と投く脱去る开ゞ中ふ第一の隊長る小幡木立頭東良と。頭人九本佛九

郎望洋の隊の両艦ハ辛くして燬を逃れーらども既ふ其舵ハ焼亡て小舫もあゝぶるーゝば俱ふ澳ふ漂ひ。と小森高宗千代丸豊俊浦安友勝並ふ木曽三助季元ハ其隊の快船數艘をもく透間もわゝせぎ赶蒐る。高宗と豊俊ハ九本佛九郎ゞ隊ふうち向ひく。兵を我めて攻戰ふふ佛九郎望洋ハ本事ある猛者ゑれば左右るく敷も伏られゞ其隊の兵も皆死を究めて免れゝ志と思ひけん敵の船ふ飛乗々々或ハ引組ゞ刺迭へ或ハ俱ふ海ふ入る在昔壽永の戰ひも徒やありけんと思ふめる。望洋ハ近つく敵を殺拂ひ殺退けて竟ふ千代丸豊俊と鎗と合ゝ一上一下と迭の奮男術を盡ひ両敵の船寄てハ辟ひ辟ひてハ合ふ生死の海ふ潮成を知死期時孰先ぞと目る程ふ豊俊既ふ腕乱れて那身危ふりければ小森高宗是を見く又蝕くも船をよせ合せ。遂ふ九本望洋を。厮敷もふもれども。俱ふ軍令を守りく首を捕らを敵の殘兵の降

るを饒して這鬪戰に果ふけり。介程ふ浦安友勝木曽季元に両隊の快船
二三十艘を飛が似くふ走らせ来く。小幡木工頭東良の没舵艦を巡木香
桁の像くうち囲ませく。掬んと競ひ蒐るを東良に毫も怯まぎ他に是管領四
家老の一人ゆく。武勇抜萃の雪えあり且其家臣木代漢彷太名増瀬五四郎
と喚做くる。両個の猛者ありけり。俱ふ六の隊ふありければ。主僕力を勠せ敵を防
ぎく。撓む士卒を罵辱る。刃尖鋭かりければ。友勝季元勇敢くとゝども。尚鬪戰を互
角ゆく。両敵雌雄を分ざりけり。然があの時大阪毛野胤智に小幡東良の猶勇
るるを豫より予知りくれば。友勝季元卒介ゆく。捕漏さともあらん欲とそ其身
も船を找せる。間近く寄せ合せく。舳頭ふ発児を建させる。銕をのく輪縁
あるる。軍扇を採んく尻を揖く。端然とゝてうち見て居り。然が里見の衆兵を
是ふ機をるく奮勇十倍勝ふ無くる。介程ふ浦安友勝木曽季元に俱ふ

那両個の猛者。木代漢彷太名増瀬五四郎と。挑戰ふ。平嗚許季元竟ふ
瀬五四郎を。ぐらりまんと斫仆さの時小幡東良に鎗の尖頭ふ血を濺ぐく近
づく敵を幾名殺刺殺して寄せ立ぎ。今瀬五四郎が斃れを見くく怨ふ堪
ざれが奮然くる鎗を延く。耶と聲くけて。季元の肩尖を禹敷と刺さ刺
きく。季元身を仰反せ海へ夾と隊ーくば東良ゆくと鎗を直ーて二三度刺
んと。推下さを。季元に水中ゆく。敵の鎗の蛭纏ふ楚と撞りる身を浮せ。曳くく隨ふ敵の
艦ふ跳り入りく其鎗の幹を握扱て東良ふ引組で。操仆さんと角へども。東良も
坂東ふ名高る力者。ければ敢又物ともせぎ。竟ふ季元を組伏せ。首を搔ん
と七首を撈りく。抜きく。程ふ毛野に持る軍扇を礙と擲りる術錯ぎ東
良眉間を打傷られて。颯と潰る鮮血と共ふ眼眩ませ。仰反れば季元下より反復
あ。壓さく索を被きくるふ東良。膂力剛ければ其身を枫で掙せぎ。當下里見の雄

兵船及浦安友勝い竟ふ木代漁伯太を斫仆して自家の士卒共侶ふ季元を相援けて折累りつ東良を緊しく結束りく牽居け。然が小幡の隊の兵船の悍兒者い既ふ斃れぬ其餘い敵ふ殺立られて今東良の虜ふ做るを拯ふ暇わらざれば誰ら亦よく敵ふ中らん皆又を捨跪ゑく。俱ふ擒ふ做りふけ。恁而季元友勝い生口小幡東良を這方の船ふ移し乗せて軍師の実検ふ入れしが毛野ハロハ管嗟嘆ふ堪ず憮然ととしていへるゑう。現孫子を讀む者ハ非如温順の君子といへども不仁の心の起らぬいなし其人を殺してのち已を利する方の教ふ由れば之現兵を凶器とする哉抑我両館里見殿御親子ハ今の世ふ又ゆ易らぬ仁君ふ御坐せども我毎敵を迎へて死生を爭ふ這戰場ゆく何で仁慈を行ふふ由わらんや是則乱を撥めく民保ふ湯武の心ふ同じかるべ已ゑくと獨言する貌を伝と更めて却東良ふ向ひていふゑう。小幡生今日の挿ゑ視を驚くもまぢふ最愛くて我風火の謀をもて寄

隊の衆艦を焼ゑしよりて定正主を首ゆく其隊長諸頭人雑兵ふ至るまで敢敵ふ中る者ゆく皆免れぬく欲する故ふ友て死する者ヨクり然すと和殿ハ乗る船の楫を焼れし故るべけれど敵ふ中りて血戰して事のあらふ至りハ尾樂の中る真玉ふ似くり我其武勇を愛るの故ふ解恕してかへ汐さ見和殿一箇を饒しうとそ我勝軍の負べもあらぬ。あるを我君の御心ハ我私の慈悲善と思ひて兵毎ゑ其索を早く解ぎ。といそぐせハ執索の雑兵何と免て東良ふ被る索をゑ解く撥遣り棄れば東良ハ身の福ひふ且恥且感謝ふ堪ず姑且して毛野ふ向ひていふゑう思いざりける慈悲放免現江湖上の噂ふ錯ぎ里見殿君臣の仁心あふ至んとハ是ふ就ても恥あゑ這回扇谷殿の攻伐ハ侮人們の萬る所我始より其ヲを知れども諫く聽るべゑふあらざれハ心ゆもあらぐ我衆と倶ふ今日の水戰ふ従ひふふ一戰ふ及ぜあて既ふ大敗あり主將の安危を知るよりもゆく我身一箇免れうとく今ゆら何

ら
名の面目あり。故の城地を選んや。君辱めらるゝ時死臣死をとゝ
部の萬の義烈を及ぶこと。我も亦然だろの。志を致さべ。已れ〳〵是まで。とゝ
詫らぎ傷る。雑兵の帯する太刀を冒光りと抜合るるもの。項を楚と推加てみづ
く首を斬落して軀へ撲地と俯こうける。思ふ優しる東良の勇猛義烈を驚
嘆ずる。友勝季元士卒に向ひ。小森高宗千代丸豊俊も既に敵に戰ひ克く。
船を併べて在りしかば這為体を視も听も。俱に感嘆をうける。そゞ中に大阪毛
野い憶ずも膝を拍鳴らして。嗚呼果せるかな。忠臣義士の生を獻ひて死を樂む志。
誰も恁ぞあるべけれ。定正賢良ぞうざれば。彼ひ都て道に違べど猶其大夫に道灌
あり。且那子に助友あり。又這小幡東良あり。あるを以て其大職を失ぬ。削らるゝ事あり。
ども。いまだ亡びざる所以は先や這亡骸を宅眷に贈りて我君の大仁大慈を知らしめん。
各よ兵毎其生口を解饒して送るべく這意を告知せよ。とのふ士卒ぞうちろ。恩

赦の一芝に及ぶ程に毛野い又舵工に課く。那艦に相応しかるべ。舵一挺を
擇出さるべく。小幡の士卒に取されば東良の残兵ら頭を敲ぎ恩を謝して。
隨即東良の首と其骸さへ抬起しつ故の艦に移し載々別を告ぐ。順
風に儘る帆を揚ぐ。相模地投ぐ還らぬ如く世間に脆ぎい
人の命をかくて又毛野渝智い高宗豊俊友勝季元ぞのの日の挿ぎを誓ぐ
いふ。各戰功甲ひる。千代丸生い舊罪を償に足りぬべ。就中木曽生らいでも
あるべとみづう。杉倉翁の季子に。武者助の弟ぞれども尚青年ぞとのぐ。今
番初陣へと。小幡東良と戰ひ時水中の挿ぎい実に奇にして亦妙ぞ。
藍より出ぐ藍より蒼ぎ久後負しぞ。和殿其肩矢ぞいい浅痍ぞれども潮
水に入りてれば風ぐ療治せよ。とのふぐも。疵て准備の茱を含出して其鎗傷に塗ら
れる労勤ぞ閑ぞぐれば季元深く感謝して。心八入に勇ぎける。當下毛野い又に。

かよそ
約莫その間戰ふ大角ゞ今まゞ出て來ざるハ故りもあらん。心許なし。獨那人のこゝろぎ。
敵の為ふ保質ふせられる妙真音音曳ゑ單郎も恙あらぎを胸安くらゞ疾五
十子の城ふ推寄て一旦城を攻合まゞ猶大敵を懲まふ足らゞ四婦女の安危を訪ふ
由ゑ。今勢ふ乘らゞて竟ふその圖を失ゞ蛇を殺して頭を逃ま後の患ひあらぎを疾
柴浦へ船を找ん諸軍兵ゑの意を沿て。先腰戰飯を披くべ。とゝふを友勝も皆諸
ゑ。現那四個の婦女子ハ今も五十子の城ふ在ん定正逃て城ふ還らゞ必敗軍の恐ふ堪
ぎ。て四個の保質を裁べ。いそゞのゑハ理りもとゝへ亂智點頭て我も亦始より飽まゞ苦
計を施さゞれゞゑの田地ふ届りゝ。ゑり非如定正燬を免れて城ふかゝり入るとも只心怯れ胆
落て防戰の備をゑさんのゑ亟ふ保質を裁まふ暇あべらゞゑの美ハ心易らてん。と解れて大家感
佩を但大村大角ゞ三浦暴三郎義武と爭ひ安危ゞまゞ具ゑらゞ。開ハ又下回ふ解分ると聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十三四　終